三宅島新報

発行所：三宅島ふるさと再生ネットワーク
〒100-1101
東京都三宅島三宅村神着 320-2
TEL 090-4922-0798
発行人：会長 佐藤就之

村長選 櫻田氏が当選

島民の声生かした村政を

三宅村の村長・村議選挙が２月12日に行われ、村長選では前教育長の櫻田昭正氏が、高濃度地区規制解除などを訴え新村長に当選を果たした。

三宅村の村長・村議選挙は、２月12日に日投・開票が行われ当選者が決まった。

村長には３人が立候補して大激戦となったが、現職の平野祐康氏と村議会前議長の佐久間達己氏を破って前教育長の櫻田昭正氏（72）が当選を果たした。

今回の選挙における有権者数は、２４６２。投票者数は、２０１１（81・68％）で高率となった。近年各種選挙の投票率は低下していたが回復した。

当選した櫻田村長「三宅に住むことを誇りと思えるようにしよう」と挨拶

行政不信の克服に期待

村長選で当選した櫻田昭正氏の選挙公約は、①人材育成②高濃度地区規制解除③空路海路の改善・確保④基幹産業・観光振興⑤人工透析の導入⑥高齢者支援と充実した医療対策⑦人口対策。キャッチフレーズは、三宅島の空・海のように透明な村政を！　村民と村政が心を合わせた村づくりを目指して元気と笑顔を発信！を掲げた。内容は具体的で踏み込んだ政策で、村民の支持を得た。

本紙の読者はお気づきだと思うが、ふるさとネットが一貫して在京者・被災者島民の切実な声・要望として訴え主張してきた高濃度地区の規制解除と再生、人工透析の導入等ようやく村政に届き実現の可能性を獲得した。

「三宅島新報」第36号で一橋大学大学院猪飼周平准教授が指摘した住民と行政の相互不信を克服するラストチャンスとして努力したい。（佐藤）

村長・村議選挙結果

【村長選開票結果】

当選　櫻田　昭正（新）929票（47%）
　　平野　祐康（現）613票（31%）
　　佐久間達己（新）432票（22%）
無効投票・不足票　37票

【村議会議員選開票結果】

当・長谷川一也（新）650票・伊ヶ谷
当・上松　幸男（新）310票・坪田
当・彦坂　明伸（新）200票・阿古
当・谷　　寿文（現）170票・阿古
当・平川　大作（現）166票・坪田
当・平野　辰昇（現）154票・阿古
当・長谷川　崇（現）151票・伊ヶ谷
当・浅沼　徳広（現）145票・伊豆
　　栗原　　稔（新）19票・阿古
無効投票・不足票　46票

（注）①村長候補は、三者とも無所属②村議候補は、平川大作（共産党）、長谷川崇（公明党）、他は無所属③パーセントは４捨５入。

有権者数（６日現在）2467人（男1345人、女1122人）地域別・神着581人、伊豆283人、伊ケ谷145人、阿古884人、坪田574人

事務局便り

○第27回世話人会開催
３月17日（土）18:30～
場所：巣鴨ルノアール会議室

○島市のお知らせ
３月４日（日）11:00～
場所：坪田旧体育館

○ＨＰ改設のお知らせ
ふるさとネットのホームページのURLが新しくなりました。（この面の欄外を参照）

○ご寄付のお願い
郵便振替口座
口座番号：00120- 3-545036
口座名称：三宅島ふるさと再生ネットワーク

【三宅島ふるさとネット事務局】
郵便番号：173-0005
住所：板橋区仲宿 25-6
電話：03(3963)5678
FAX：03(3963)5697
担当：大石・加藤

アンケートもとに行政に要望

高濃度地区の早期解除等

前号に掲載した、ふるさとネットが行った高濃度地区と在京者向けのアンケート結果は、実施の時期を選挙前に設定したこともあり、多くのマスコミ等に注目された。今号ではその結果をもとに、未帰島者の島への渡航費用の補助や高濃度地区規制の早期廃止など行政への要望をまとめた。

三池地区の取り壊された家屋跡地　野菜を蒔き早期規制解除を待つ

在京者と高濃度地区の皆さん、第3回目となるアンケートにご協力いただき、ありがとうございました。

ふるさとネットでは、第1回目は、2006年11月、第2回目は、2009年1月に実施、公表した。今回は、高濃度地区問題を重点におき在京者も高濃度地区在京者と他地区在京者を分け対象者とした。

このアンケートの実施時期は当を得たもので、村長、村議会の任期満了に伴う選挙直前に「三宅島新報」に掲載した。さらに細部は、「三宅島ふるさとネット」ホームページの「島民の声」に収録した結果、多くのマスコミ等からも注目された。

今回2月12日に実施された村長・村議会選挙では、村長選挙において櫻田昭正氏が「高濃度地区規制解除」を明確な公約として、当選を果たした。

【未帰島・在京者（高濃度地区を除く）の行政に対する要望】

①三宅島への渡航費用に対する補助をしていただきたい。

在京者は、三宅島に家屋、畑、お墓などがあり、中には、固定資産税も村に納付している者もいる。三宅大学関係者は2割の船賃の割引や都も東日本被災地観光に旅費の補助もあると報道されている。

在京者と家族を島につなぎとめる努力は、交流人口を増やし経済の活性化にも役立つ。以前、東海汽船にも折衝したら村の意向はと聞かれた経過もある。

②三宅島島内の住宅の補修や再建への補助をしていただきたい。

③人工透析導入、医療、福祉施設の充実で帰島を可能にし、雇用も増やしてほしい。

④その他

【高濃度地区住民の要望】

①高濃度地区の廃止、廃屋などの解体・撤去条件の緩和、住宅再建に関する支援をしていただきたい。

自宅帰島者には、家屋修繕補助、農地の整備、灰とりなど支援をして来た。12年近く放置された高濃度地区に対する支援は、当該者のみでなく、観光、産業振興の要でもある。

②その他

帰りたくても帰れない、毎日望郷の念に駆られながらも、都会での生活を余儀なくされている人達の気持ちは良く分かっているつもりです。

三宅村再生のための課題は、人材育成、高濃度地区の問題・産業振興、少子高齢化、医療対策等山積しており、かなりの時間も動力も必要とします。今直ぐやらなければならないもの、時間をかけて検討すべきもの等に分けて、たゆまず、焦らず、着実に取り組んでいきます。

櫻田村長から「集い」にメッセージ

再生へ「たゆまず　焦らず　着実に」

就任にあたって、全職員に話したことは、「生まれ育った三宅島で暮らしたい！悲願でもあるそれらの人達の思いを叶え、家族共々故郷で暮らせることの幸せと、島民の安心安全な生活環境を整えるためにも、人工透析機の導入を推進する」ということです。

次世代に、子供たちや孫たちに、住みよい三宅島を残すため、住民、議会、執行機関が一体となり、この困難を乗り越え、未来に向かって村づくりをしましょう。

ネット新春の集い おきみくらで
被災地繋ぐ「絆」テーマに

ふるさとネットの新春の集いが、2月18日に行われた。東北大震災の被災地である福島県からも3人が参加。参加者はパフォーマンスなどを楽しみながら、絆を深めた。

文化放送キャスターの高橋民夫さんの呼びかけで手を繋ぎ「絆」を確かめ合う参加者

福島から3人が参加

ふるさとネットの平成24年度新春の集いは、2月18日の18時30分から、東京都品川区の青物横丁にある「ビストロおきみくら」で開催された。

今回は、3月の東北大震災で被災し、東京へ自主避難した福島出身の3名にも参加していただいたこともあり、三宅島と福島、二つの被災地の結びつきをテーマにした会になった。参加したのは、昨年もお越しいただいた舞踊家の鶴吉さんをはじめ、三宅島出身の方、マスコミ関係者、DTPAほか協力者の方々など42名だった。

集いは2部形式で行われ、第1部の初めにはDTPA作成の、過去に起きた日本の災害を振り返りながら、被災地間で協力することの大切さを訴えるスライドショーが上映された。

そして、文化放送防災キャスターの高橋民夫さんが音頭をとっての乾杯に続き佐藤就之会長が挨拶。参加者は新村長下での体制や福島支援のあり方に関する話を、うなずきながら聞いていた。

その後は、大妻女子大学の千川剛史教授、櫻田昭正新村長のメッセージ（2面に掲載）の代読などが行われた。

「舞い上がれ！TABASHI」を踊るネットメンバー

余興など楽しく

第2部は三宅で旅館を経営していたマスターのおいしい料理を食べつつ、歓談や余興を楽しむ時間となった。

その中では鶴吉さんの「望郷の詩」の舞踊や、ネットメンバーによる手品、「舞い上がれ！TABASHI」のダンスが披露された。また、向上高校の先生方が結成した「向上ボーイズ」は、猪苗代湖ズの「I love you & I need you ふくしま」の歌詞を一部三宅島仕様にした替え歌など4曲を歌い、場を盛り上げた。

最後に酒井一豊副会長の閉会の挨拶、そして高橋民夫さんの3本締めで会は締めくくられた。

福島から参加の千田さん
「助かった命で頑張りたい」

2月18日に開催されたふるさとネットの新春の集いに参加した千田香菜さんは、福島第二原発から約40kmのいわき市で被災をした。

自宅マンションが半壊したため、地震発生直後は何も持ち出せないまま避難所で1週間生活した。東京にある祖父の家に身を寄せたのち、2回目の応募で当選して、昨年4月に新宿区の都営住宅に移り住んだ。

現在は東京都板橋区にあるあすなろ保育園に事務員として勤務。一緒に暮らす父親と妹もそれぞれ新しい仕事が決まり、生活は安定してきているという。

集いに参加して千田さんは、「三宅の活動は盛んですごいと感じました。福島はまだ終息していない状況ですが、助かった命で頑張りたい。行政には、すべての人に平等な政治を望みます」と思いを語った。

新報の経験を東北に

岩手の仮設で新聞づくり支援

昨年12月28日から30日まで、DTPAの活動に協力してふるさとネットのメンバーが岩手県の仮設住宅でミニコミ紙編集の支援を行った。本紙編集の経験を生かしたこの取り組みは、今後も継続される。

田老にある仮設住宅での新聞編集（昨年12月）

12月 第二段の訪問

DTPAのメンバーが、新聞づくりの支援を行っているのは、岩手県宮古市田老のグリーンピア三陸みやこの敷地内に設置された仮設住宅だ。昨年8月に同会がその母体である向上高校新聞委員会とともにボランティアを行った際に「たろう元気なまちづくりプロジェクト」というNPOから依頼され、9月にパソコンを使用した新聞編集の講習を行った。

12月の訪問はその第二段で、8月の現地ボランティアに同行したことからふるさとネットのメンバーも参加。前回に引き続いて新聞編集の講習をするとともに、「明日に向かって」と名前の決まった新聞の取材に同行をしたり、編集作業の手伝いをした。

住民の情報共有のために

田老の仮設住宅で、新聞づくり支援の要望があったのは、住民の間で情報の共有をしたいというのが理由だ。

現地では仮設住宅が、グリーンピアの元駐車場と陸上競技場、テニスコートの3カ所に約400設置されている。敷地が広大なこともあり、生活やイベント、さらにはNPOの活動などに情報が十分に伝わっていないという。

また、復興に向けたまちづくりの議論も始まっているが、それを住民を巻き込んだものにしたいというのが依頼をしたNPOの狙いでもある。

なお、次回の訪問は今月3日、4日に予定されている。

三宅への思い熱く

記者は「聞くボランティア」と実感

毎日新聞夕刊編集部　記者　大槻　英二さん

04年7月20日。平野村長（当時）が帰島宣言したその日から、私は三宅島担当になった。どこそこの団地に誰々が避難していると聞けば、会いに行って話を聞いた。

そんな中、脳こうそくで倒れた夫とともに都営住宅で避難生活を続けていた女性から「あんたと話していると、親戚の人と話しているみたい」と言われた時は、記者冥利に尽きると思った。新聞記者は「聞くボランティア」ではないかと、私は三宅島の取材を通じて実感した。

4年5カ月もの全島避難を経て、コミュニティーを再生する難しさに三宅島は直面している。福島の人たちもこれから同じ道を歩むことになる。三宅の教訓が少しでも生かせないかと願ってやまない。

編集後記

三宅島は、全島避難指示の解除から7年を迎えました。

2月18日の新春の集いでは、原発事故の影響で避難をしている福島県出身の方もいらっしゃって、貴重なお話を伺うことができました。

岩手県での新聞づくり支援の活動も含めて、災害被災地の復興に向けて、私たちがどんなお手伝いができるのか、今後も考えていきたいと思います。（DTPA一同）

【メッセージ】

新春の集いで前東京都三宅支庁総務課長の齊藤實氏からいただいたメッセージを紹介します。

2000年9月の全島民避難から早いもので12年目を迎えることとなりました。

様々な事情で、三宅島に帰れない島民も多数おります。

弁護士、司法書士などで構成する「災害復興まちづくり支援機構」では、島民の様々な相談に対して無料で応じています。

詳細はホームページで。

http://www.j-drso.jp/

【ご寄付者名】

浅川明子様、吉田信行様、吉野文雄様、中島修平様、高橋栄一様、M様、佐藤宗ノ子様、佐藤就之様、倉持房枝様

(12月1日～1月31日)

ありがとうございました。

この新聞は、神奈川県の私立向上高校新聞委員会の卒業生がつくる「DTPA」が編集作業を担当しています。